

探究が蒔いた 未来の種

vol.3

青春は止められない！

「高校生団体」という新しいスタイル

— ポスト震災世代はいかにして主体性〓オーナーシップを発揮するか —

文部科学大臣賞の栄冠をかけて全国1990校から562プロジェクト2717人が探究の実践を発表する全国高校生マイプロジェクトアワード。審査基準に「主体性〓オーナーシップ」を位置付ける背景には、東日本大震災以降に加速した高校生団体という新しい潮流がありました。



認定NPO法人カタリバ
パートナー
今村 亮

1982年熊本生まれ。東京都立大学卒。創業期からのディレクターとして、カタリバ事業、カタリバ大学、中高生の秘密基地b-lab、コラボ・スクールまじき夢創塾、全国高校生マイプロジェクト事務局を手がける。文部科学省熟識協働員、岐阜県教育ビジョン検討委員会委員を歴任。2019年に独立し、桜美林大学で「ディスカバ！」立ち上げ中。慶應義塾大学にて非常勤講師を兼務。共著「本気の教育改革論」(学事出版)。

ほしかった教育を 大学生が作った

NPOカタリバは2001年に大学生がつくった団体です。今でこそ従業員130人が勤務する認定NPO法人となりましたが、創業当初は法人格もなく学生団体のようなものでした。とんでもなく貧乏でしたが、熱気だけはありました。学生でも教育を変えることができる、その熱に仲間を巻き込みながら誕生しました。

その中の一人が学生時代の私です。当時のカタリバは、六本木交差点からすぐの廃校跡地の教室を事務所にしていました。あそこで未来を語り合った日々は、私の青春です。

あのころ語ったのは、教育を受けてきた当事者としての切実な要求でした。私

たちは詰め込みではなく、やらされでもなく、対話と創造に満ちた主体的な場を欲していました。

つい親や先生を批判してしまうこともありました。受けてきた愛情を想像するには若すぎたのでしょうか。なつかしいような恥ずかしいような気持ちです。

やみくもに走りながら大学生が「自分たちが高校時代ほしかったもの」を形にしたのがNPOカタリバでした。

震災前後に台頭した 高校生団体

大学生にできることは、高校生にだってできるかもしれません。あるときから東京では、学生団体ならぬ「高校生団体」が台頭し始めます。その変化は2011年の東日本大震災前後に起きました。

2010年といえば、Twitter高校生「うめけん」が「うなう。」という流行語大賞を受賞した年であり、女子高校生「みさき・ひびき」がクラウドファンディングを呼びかけ渡航費を調達し、キューバに写真を撮りに行った年でもあります。翌年には被災地支援の「Teen for 3・11」や途上国支援の「HOPER」、主催者教育の「僕らの一歩が日本を変える」(写真下)が誕生します。まさに同時多発的に、高校生たちは社会課題の現場に飛び込み始めました。

高校生団体の特徴づけるのはこのような点です。

- ① 学校の枠を超えた自主活動
- ② SNS等での活発な発信
- ③ 協賛金や寄付などでの資金調達

その在り方は、学校における部活動や探

究学習とは異なります。内なる強い動機に結びついており、起業に近いものがあります。創業当時のカタリバに似ているのです。

こうした潮流の背景にはスマホの普及や東日本大震災などマクロな社会の変化がありました。ミクロな源流として注目したいのが「日本高校生学会」の存

木本六本木ハ
時代のカタリバ事
務所(2004年
10月)



創業期の「僕らの一歩が日本を変える」(2013年)

在です。2010年に伊谷くんという高校生が同世代の交流を目的に創設し、メンバーは全国100人に達しました。当時最大規模の高校生団体で、全国紙にも何度か取り上げられました。

不運だったのは、その熱気のピークに彼らが企画した慶應義塾大学SFCでのイベントの日付が、2011年3月12日だったことです。前日に日本列島は大きく揺れ、彼らはイベント中止を余儀なくされました。しかしその後、そのイベントに参加するはずだった高校生たちが次世代の高校生団体を次々に旗揚げしていきます。彼らはそれぞれ離れた場所にいますが、スマホで連絡を取り合い、同じ衝動を共有していたのです。自分たちが動かなくては、と。

女子高校生ヘアードネーション 同好会の奮闘

あれから10年。高校生団体というスタイルは全国に拡がり、全国高校生マイプロジェクトアワードの「個人・グループ部門」は、その登竜門となりつつあります。今年グランプリに輝いたのは、小児がんに苦しむ子どもたちにウィッグを届ける群馬県の高中生団体「女子高校生ヘアードネーション同好会」でした。

晴れた3月の陽気のなか、会場に現れたのはキャメル色の制服の二人組でした。まりあさんとゆりあさんは、姉妹で団体を運営しています。明るくて礼儀正しく、陽気な一人だという第一印象。お姉

さんのほうが頼もしくて、妹さんの方が多少ボケている。しかしステージに立つと、その印象がガラリと変わりました。熱量や主体性が圧倒的だったのです。

大好きだったおじいさんが亡くなったことで、ガンという病気のおそろしさに向き合ったまりあさん。その恐怖は、抗がん剤で頭髮が抜けてしまう副作用にもあります。中学1年生の頃、まりあさんは寄付で集めた髪の毛でつくったウィッグを無償提供する「ヘアードネーション」という取組があることを知ります。髪の毛を伸ばすだけならば、自分にもできるかもしれない。高校1年生まで伸ばし続けた髪の毛を、ついに寄付したまりあさんは、より多くの頭髮を集め、子どもたちを笑顔にするため「女子高校生ヘアードネーション同好会」を立ち上げます。

しかしあるとき、頭髮を寄付する先の団体と連絡がつかなくなってしまう。その事件には、頭髮は転売すると高値がつくという事情が関係していることを知ります。シヨックを受けたまりあさんは、寄付先となるウィッグ会社や病院を自分たちで探す決意をします。

まりあさんの発表で、私が涙をこらえられなかったのは、クラスでの出来事です。活動が目目され、メディアの取材を受けるようになった頃、急にクラスの友達に無視され始めます。つらい学校生活を終えて夜中に帰宅した後、郵便で届いた大量の髪の毛を一人で整理する苦しい日々。涙があふれることもありました。「今ここでやめたら、私には何もなくなってしまう」

そんな時期を支えたのが、妹のゆりあさんでした。二人は協力し、一心同体で活動を続けます。子どもたちからの感謝の声や、頭髮とともに寄せられる応援メッセージが、二人の心の支えとなりました。あのとき挫折しなかったからこそ、団体は今でも続いています。まりあさんが高

校を卒業した後、妹たち後輩世代が活動を引き継ぎました。今では700人からの頭髮を託される規模になりました。高校生団体から話を聞く限り、こうした悲しい事例は少なくありません。クラスの友達だけでなく、先生や親に反対されたというケースもあります。活動を辞めなにかぎり指定校推薦は出せないと言われた高校生も知っています。

彼女たちのような高校生を孤立させないため、私たちはマイプロジェクトアワードに「文部科学省後援」という冠をかけています。社会はあなたを応援しているよ、と大きな声で叫ぶためです。

ちなみにまりあさんはこの春から、国立大学の医学部で学んでいます。きっかけはヘアードネーションの活動で出会った医師の影響だと言います。本気の活動は、本気の進路選択にもつながります。だからこそ、未知なる課題に挑む高校生を応援する社会を私は作りたいのです。



女子高校生ヘアードネーション同好会(2018年3月)



ウィッグ第一号を提供した児童と(2018年3月)



東京都立小児総合医療センターの医師との話し合い(2018年)

マイプロジェクトとは

高校生が地域や身の回りの課題や気になることをテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通じて学ぶ探究型学習プログラムです。マイプロジェクトでは、プロジェクトのテーマ設定に対する「主体性」と、たとえ小さくても実際に「アクションを起こす」ことを大切にしています。

<https://myprojects.jp/>